

<原 著 論 文>

[学生の精神衛生研究班]

大学生活の過ごし方のタイプとその心理的特徴に についての検討 (6)

都 筑 学 宮 崎 伸 一
村 井 剛 早 川 みどり
永 井 暁 行 梁 晋 衡

Investigation about Types of College Life Perspective and
Their Psychological Characteristics (6)

Abstract

This study aimed to examine how identity and career development differ among some types of college life perspective. The participants were 705 undergraduate students in Chuo University. They were asked to complete a sheet of questionnaire which consisted of the following scales; college life perspective, Dimensions of Identity Development Scale, information collecting behavior scale, career seeking behavior scale, anxiety for career choice, and self efficacy for career choice behavior. Using cluster analysis with scores of 19 college life activities by ward method and K-means method, five different types of college life perspective were confirmed. The obtained results showed that personal relation group had higher level of identity exploration, self efficacy for career choice, and career anxiety than other groups. Latent structural modeling clarified that time use for personal activities and spontaneous learning activities had positive effects on enhancing directly information collecting and career seeking behavior. Based on these findings, functions of personal relation activities and spontaneous learning activities in college life on school adaptation and forming social skills were discussed.

1. 問題と目的

本研究は、大学生生活の過ごし方のタイプによって、アイデンティティの発達や就職活動に関する意識や行動がどのように異なるかを明らかにしようとするものである。

本研究は、これまでわれわれが蓄積してきた以下のような知見にもとづいて行われるものである。

都筑ら（2011, 2012, 2013, 2014, 2015）は、大学生生活の過ごし方には、対人交際を中心にしている対人活動中心群、自主的な勉強を中とした自主勉強中心群、大学での授業への出席以外の活動が少ない授業出席勉強群、インターネットやゲームなどの活動が中心となっているヴァーチャル活動群などの異なるタイプの存在を明らかにしてきた。

都筑ら（2013）の調査からは、対人活動中心群や部活動・サークル活動にかかわっている学生ほど、コミュニケーション能力（藤本・大坊, 2007, 大坊, 2003）やクリティカルシンキング（廣岡ら, 2000, 2001）、ハーディネス（森・東條・佐々木, 2005）などの大学卒業後に必要とされるような能力が高いことが明らかにされた。また、都筑ら（2014）は、対人活動中心群が他の群と比較して、学校への適応感が最も高いことを明らかにした。都筑ら（2015）によって、自主的な勉強と対人交際に時間を使うことがソーシャルスキルや居場所感の促進につながり、その結果、学校での適応が促進されることが明らかにされた。

このように大学生生活をどのように過ごしているかということは、個人の能力獲得や大学生生活への適応に影響を及ぼすだけでなく、卒業後の社会人生活のあり方にも大きな影響を与えると考えられる。

そこで、本研究では、以下の2点について検討することを目的とする。第1は、青年期の発達の課題として重要な位置を占めるアイデンティティに注目し、大学生生活の過ごし方によって、アイデンティティの様相にいかなる差異が見られるかを明らかにすることである。その際、中間・杉村・畑野・溝上・都筑（2014）が日本語版を開発した多次元アイデンティティ発達尺度を用い、コミットメントと探究の二つの次元からアイデンティティの発達を捉えることとする。Blustein（1989）が述べているように、アイデンティティの探求やコミットメントによって、キャリアの探求や職業へのコミットメントが異なることが予想される。

第2は、就職活動における自己効力、情報収集行動、進路探索行動、不安のあり方が、大学生生活の過ごし方のタイプによって、どのように異なるかを明らかにすることである。大学生にとって、就職活動は重要なライフイベントであり、就職活動に関する研究は多く行われている。

特に就職に関する不安については誰もが青年期に一度は経験する感情(藤井, 1999)と指摘されるほど一般的なものである。この就職活動に対する不安が強いとストレスがたまったり、うつ状態になる危険性が高くなることが指摘されている(藤井, 1999)。一方、就職活動不安は必ずしも就職活動に妨害的な影響を及ぼすだけではなく、就職不安があるからこそ早くから情報収集を始めるという促進的な影響を及ぼすことも指摘されている(森田, 2014)。このように就職活動への不安は否定的、肯定的の両者の側面をもった就職活動への態度であると言える。

また、就職活動への肯定的な態度には就職活動への自己効力感があげられる。浦上(1995)は進路選択に対する自己効力の強い者は進路選択行動を活発に行い、努力もするが、自己効力の弱い者はたとえそれが自分の人生の目的を達成するために必要なものと理解していても、進路選択行動を避けたり、不十分な活動に終始してしまうと指摘している。この傾向は森田(2014)によっても同様に示されている。

このように就職活動への不安や自己効力感が就職活動を行っていく学生にとって重要なものであることは指摘されているが、どのような学生がこの不安や自己効力感が高くなるのか、あるいはどのような大学生活における活動がこれらの態度に影響するのかは十分に検討されていない。そこで本研究では、大学生活の過ごし方が就職活動への不安や自己効力感にどのように影響し、また就職活動における情報収集や進路選択行動に影響するのかを検討する。

〔都筑 学〕

2. 予 備 調 査

2.1 目 的

溝上(2009)が大学生活の過ごし方の尺度を作成して以降、インターネットの普及や就職活動の変化などに見られるように、大学生の生活環境は大きく変わってきている。そこで、溝上(2009)によって作成された大学生活の過ごし方尺度が、現在の大学生の時間の使い方に対して一般的なものを網羅しているかどうかを確認するために予備調査を行うことにする。予備調査では、既存の項目に大学生のどれくらいの時間が費やされているかを確認し、また大学生にとって時間の使い方の既存の項目以外にどのような活動が行われているかを検討することを目的とする。

2.2 方 法

調査対象者

中央大学に在籍する学生126人（男性65人，女性61人），平均年齢は19.63歳（SD=1.41），学年の内訳は1年生36人，2年生42人，3年生31人，4年生17人であった。

調査時期

2015年6月

調査内容

調査の目的や参加が自由であることなどの注意点は質問用紙の1ページ目に記載され，回答をもって調査の同意を得るものとした。

調査内容は，以下の通りであった。

1) フェースシート

性別，学年，年齢，学部，住まい，クラブ活動への参加を尋ねる6項目を用いた。

2) 大学生生活の過ごし方

溝上（2009）が用いた大学生生活の過ごし方の尺度15項目（家庭教師のアルバイトと家庭教師以外のアルバイトの2項目はアルバイトをするという項目に統合した）に加え，大学教員および心理学を専門とする大学院生計6人の協議によって新たに提案された6項目，①SNS（Twitter，Facebook，mixi，ブログなど）を利用する，②インターンや就職のための活動を行う，③ボランティア活動を行う，④アルバイトをする，⑤友だちとLINEやメールをする，⑥資格取得や語学力向上などのためのダブルスクールに通う，の計21項目が測定された。これらの項目について，1週間に費やす時間を（1）全然ない，（2）1時間未満，（3）1～2時間，（4）3～5時間，（5）6～10時間，（6）11～15時間，（7）16～20時間，（8）21時間以上の8段階評定で回答を求めた。

3) 大学生生活の過ごし方以外の活動についての自由記述

上記の大学生生活の過ごし方の項目以外に，日常生活で行っている活動について，その活動の内容と1週間の中で費やしている時間を自由記述形式で質問した。教示は以下の通りであった。

「上記の回答以外で，あなたの日常生活で行っている活動があればその活動の内容と1週間の中で費やす時間を教えてください」

2.3 結果と考察

2.3.1 大学生生活の過ごし方尺度について

予備調査では各活動に対して，どの程度の学生が時間を費やしているかが検討された。大学

生活の過ごし方についての項目は、現在の大学生にとってより一般的で学生の取り組みに個人差がある項目が望ましいと考えられる。そのため、まず予備調査では費やされる時間の平均値と標準偏差に加えて、1時間以上その活動に従事している学生(活動者)の割合を算出し、検討した。表2-1に、それらの結果を示してある。

予備調査の結果、既存の項目はその多くが学生の日常生活に根差したものであり、半数以上の学生が行動している項目が多いことがわかった。半数の学生の参加が得られなかった項目としては、「4 新聞を読む」と「17 コンパや懇親会などに参加する」の2項目があった。これらの活動は現在の大学生の日常生活では、あまり行われていないものであると言える。この2項目については項目の妥当性を含めて今後より詳細な検討が必要であると思われる。ただし、

表2-1 大学生生活の過ごし方尺度の記述統計量および活動者の割合 (n=126)

項目名	Mean	SD	活動者の割合(%)
1 勉強のための本(新書や専門書など)を読む	2.50	1.42	71.4
2 授業とは関係のない勉強を自主的にする	2.64	1.90	67.5
3 SNS(Twitter, Facebook, mixi, ブログなど)を利用する(n)	4.17	2.09	90.5
4 新聞を読む	1.79	1.46	42.1
5 インターンや就職のための活動を行う(n)	1.92	1.63	35.7
6 ボランティア活動を行う(n)	1.40	1.38	13.5
7 アルバイトをする(n)	4.60	2.52	72.2
8 友だちとLINEやメールをする(n)	4.45	1.90	97.6
9 クラブ・サークル活動・部活動をする	4.32	2.46	80.2
10 同性の友だちと直接会って交際交流する	4.69	1.93	96.0
11 資格取得や語学力向上などのためのダブルスクールに通う(n)	1.49	1.65	10.3
12 異性の友だちと直接会って交際交流する	3.24	1.95	77.8
13 授業に関する勉強(予習や復習, 課題など)をする	3.17	1.70	83.3
14 マンガや雑誌を読む	2.29	1.19	67.5
15 テレビをみている	3.67	1.87	85.7
16 インターネットサーフィンをする	3.56	1.99	82.5
17 コンパや懇親会などに参加する	1.98	1.46	44.4
18 娯楽のための本(小説や一般書など)を読む	2.30	1.38	62.7
19 大学で授業や実験に参加する	6.10	1.97	96.0
20 ゲーム(ゲーム機・スマートフォン・コンピュータゲームなど)をする(n)	2.70	1.82	60.3
21 通学にかかる時間	3.75	1.99	93.7

注:既存の尺度(溝上, 2009)から変更のあった尺度には(n)を記してある。

これらの2項目を取り除く積極的な理由がないため、これらの項目も後の分析には取り入れることとした。

新しく追加した6項目については3項目が半数の学生の参加のない活動であった。半数の学生が活動を示さなかった項目は「5 インターンや就職のための活動を行う」、「6 ボランティア活動を行う」、「11 資格取得や語学力向上などのためのダブルスクールに通う」であった。これらの項目に示された活動は一部の学生において当てはまるものであり、多くの学生にとっては日常生活の中では行われていないものであると考えられる。多くの学生が経験する就職活動は、それを経験する学年・時期がある程度決まっているため、日常的な学生の生活の特徴を表すものとしては機能しなかったと言える。これらの項目については、多くの学生が一般的な回答（使う時間が0分）を示してしまうことが予想されるため、新しい大学生生活の過ごし方の尺度の項目としては適切ではないと判断された。

2.3.2 自由記述によって得られた時間の使い方について

自由記述によって得られた生活の時間の使い方は29件であった。それぞれの時間の使い方の具体例とその活動に使う平均時間を表2-2に示した。また、得られた生活時間の使い方をカテゴリーに分けて分類した。カテゴリーの分類については心理学を専攻している2人の大学院生がそれぞれの回答者から得られた時間の使い方について分類を試みた。

表2-2に示された自由記述の結果を元に、大学教員および心理学を専門とする大学院生計6人によってそれぞれのカテゴリーに含まれる活動が大学生生活の過ごし方の尺度に含まれるべきかどうかを検討した。その結果、日常生活の中で時間をとられることになる家事（カテゴリー中分類）は大学生の活動に占める割合が大きいものと推測され、この家事を行うという項目を大学生生活の過ごし方に含めることにした。

家事は一人暮らしの学生と実家暮らしの学生の違いが表れやすいものと推測される。また、家事の時間がとられることは通学にかかる時間と同様に学業や趣味に費やす時間を制限することに繋がる。その結果、それらの活動の少なさや、時間の管理などに影響することも予想できる。このように他の時間に影響を与えうる項目としての可能性をもつため、家事への活動は大学生生活の過ごし方の項目として取り入れることに意義があると考えられた。

一方、同じく活動時間の比較的に長い睡眠については、これは積極的な活動ではなく、どの学生にも必要なものであるため今回の検討では尺度に含めないものとした。また趣味の活動については従来の項目にもインターネットや漫画、ゲーム、娯楽のための本などの趣味に関わる項目が存在していることから、重複する回答を避けるために本研究の尺度としては用いなかった。

表 2-2 時間の使い方尺度以外の具体例と平均時間

大分類	カテゴリー		具体的な時間の使い方	カテゴリーの平均時間			
	中分類	小分類		time	s-time	m-time	l-time
日常生活	家事	家事	家事（料理, そうじなど）	7.00	5.75	5.90	12.96
			家事	4.50			
		食事づくり	朝昼夕食づくり	10.00	8.50		
			ご飯づくり	7.00			
	身支度	洗濯	洗濯をする	1.00	1.00	1.50	
		化粧	化粧をする	1.50	1.50		
	生活	食事	ご飯	10.00	10.00		
		睡眠	眠る	9.00	38.33		
			睡眠 寝る	50.00 56.00			
		ペットとの 関わり	ペットの世話	ペットの散歩, そうじ	4.00	2.75	
	犬の散歩			1.50			
	ペットとの交流		ペットと触れ合う時間	7.00	7.00		
	趣味・余暇	趣味	趣味	趣味	8.00	8.00	
音楽活動			音楽を聞く	20.00	9.00		
			楽器を弾く	5.50			
			ピアノ	1.50			
ラジオ		ラジオを聴く	2.00	2.00	5.63		
運動・ スポーツ		運動	運動	4.00		11.75	
			ウォーキング	10.00			
			ランニング	5.00			
			筋トレ	3.50			
スポーツ			バレーボール	24.00	24.00		
			ラグビー	24.00			
休息		リラックス	妄想にいそしむ	5.00	20.00		
			ぼーっとしている	35.00			
勉強	勉強	勉強	部活のための勉強	10.00	7.50	8.33	8.33
			世界遺産検定の勉強をする	5.00			
		授業	ゼミ活動	10.00			
仕事・ ボランティア	仕事・ ボランティア	作業	部活動に関する事務的な作業や考え事をする	8.00	8.00	6.67	6.67
		コーチ	少年サッカーのコーチ	4.00	6.00		
			高校の部活の外部コーチ	8.00			
対人活動	異性との交流	デート	デート	21.00	21.00	21.00	21.00

注: s-time 小分類の平均時間, m-time 中分類の平均時間, l-time 大分類の平均時間.

今後、大学生の生活について検討していく際にはこれらの項目についても再度検討することで、より現在の大学生の生活を捉えることのできる尺度として発展していくことが期待される。

〔永井暁行〕

3. 本 調 査

3.1 方 法

調査対象者

中央大学に在籍する学生705人（平均年齢19歳9ヶ月，標準偏差1歳2ヶ月）。

対象者の性別は，男354人，女348人，不明3人だった。男女比は約1：1だった。全学（理工学部を含む）の男女比は2：1であり，その数字と比べてみると女子の割合が高かった。

学年の内訳は，1年204人，2年287人，3年187人，4年24人，不明3人であり，都筑ら（2015）の調査と比較してみると，2年生の割合が多かった。

学部の内訳は，法231人，経済9人，商9人，理工165人，文209人，総合政策79人，不明3人だった。経済学部と商学部の人数が少なかった。

住まいの内訳は，自宅494人，自宅外208人，不明3人であり，自宅と自宅外の比率は約2.3：1であり，都筑ら（2015）の調査と比較してみると，自宅に住んでいる学生の割合が多かった。

部活動・サークルへの所属は，体育連盟77人，サークル421人，所属なし201人，不明6人だった。体育連盟を含め約70%の学生が部活・サークルに所属していた。

調査内容

質問紙の構成は，以下の通りであった。

1) フェースシート

性別，学年，年齢，学部，住まいを尋ねる5項目を用いた。

2) 大学生生活の過ごし方

予備調査で得られた，新たな大学生生活の過ごし方19項目を用いた。1週間に費やす時間数を

(1) 全然ない，(2) 1時間未満，(3) 1～2時間，(4) 3～5時間，(5) 6～10時間，(6) 11～15時間，(7) 16～20時間，(8) 21時間以上の8段階評定で回答を求めた。

3) 時間の使い方の満足度

Benesse 教育研究開発センター（2009）で用いられた日頃の時間の使い方に関する満足度を聞く質問項目。時間の使い方を100点満点で評定し，0点から100点までの10点刻みの11段階の中から選択する方法によって回答を求めた。

4) アイデンティティ

中間・杉村・畑野・溝上・都筑(2014)が開発した, 多次元アイデンティティ発達尺度(コミットメント形成, コミットメントとの同一化, 広い探求, 深い探求, 反芻的探求, の5下位尺度25項目)について, 「1. 全くあてはまらない」から「5. とてもよくあてはまる」までの5件答法で回答を求めた.

5) 情報収集行動尺度

樋口・塚脇・蔵永・井邑・深田(2008)が開発した, 情報収集行動尺度(企業に関する情報, 就職活動の方法, 自分自身に関する情報, の3下位尺度14項目)について, 「1. 全く重要ではない」から「5. とても重要である」までの5件答法で回答を求めた.

6) 進路探索行動尺度

樋口・塚脇・蔵永・井邑・深田(2008)が開発した, 進路探索行動尺度11項目のうち学部1, 2年生に使用できる9項目を用いた. 「1. 全く重要ではない」から「5. とても重要である」までの5件答法で回答を求めた.

7) 就職活動不安尺度

松田・永作・新井(2010)が開発した, 就職活動不安尺度(アピール不安, サポート不安, 就活継続不安, 試験不安, 準備不足不安, の5下位尺度20項目)について, 「1. 全くあてはまらない」から「5. とてもあてはまる」までの5件法で回答を求めた.

8) 就職活動自己効力感

太田・田畑・岡村(2012)が開発した, 就職活動自己効力感尺度(自己と就職の統合への期待, 就職活動への効力期待, 就職活動への結果期待, の3下位尺度18項目)について, 「1. 全くあてはまらない」から「5. ぴったりあてはまる」までの5件法で回答を求めた.

調査時期

2015年11月上旬

調査手続

質問紙に回答するかどうかは自己決定できることを伝えた上で, 授業時間内に質問紙を配布して調査を実施した.

[梁 晋衡]

3.2 尺度の信頼性の検討

3.2.1 多次元アイデンティティ発達尺度, 情報収集行動尺度, 進路探索行動尺度, 就職活動不安尺度, 就職活動自己効力感尺度

多次元アイデンティティ発達尺度（中間ら, 2014）, 情報収集行動尺度（樋口ら, 2008）, 進路探索行動尺度（樋口ら, 2008）, 就職活動不安尺度（松田ら, 2010）, 就職活動自己効力感（太田ら, 2012）に関して, それぞれの下位尺度の α 係数を求めた. 各尺度の平均値, 標準偏差と α 係数は表3-2-1に示した通りである. 表3-2-1の結果から, 「就職活動への効力期待」の α 係数がやや低かったが, それ以外の尺度の α 係数は信頼できる結果が得られた.

〔梁 晋衡〕

表3-2-1 下位尺度ごとの平均値, 標準偏差, α 係数

尺 度 名	Mean	SD	α
多次元アイデンティティ発達尺度			
コミットメント形成	3.01	0.99	0.88
コミットメントとの同一化	2.84	0.80	0.82
広い探求	3.47	0.81	0.82
深い探求	3.12	0.79	0.73
反芻的探求	3.58	0.74	0.68
情報収集行動尺度			
企業に関する情報	4.38	0.60	0.72
就職活動の方法	4.43	0.62	0.80
自分自身に関する情報	4.00	0.80	0.85
進路探索行動尺度			
	4.17	0.67	0.88
就職活動不安尺度			
アピール不安	3.82	0.99	0.88
サポート不安	3.07	1.05	0.88
就活継続不安	3.37	1.11	0.87
試験不安	3.64	0.98	0.88
準備不足不安	3.70	0.96	0.85
就職活動自己効力感			
自己と就職の統合への期待	3.40	0.82	0.85
就職活動への効力期待	3.72	0.75	0.60
就職活動への結果期待	3.33	0.61	0.84

3.3 大学生生活の過ごし方

3.3.1 大学生生活の過ごし方のタイプ

本調査では、予備調査で得られた大学生生活の過ごし方19項目について最尤法、プロマックス回転による因子分析を行い、固有値に1.5を値基準に4因子を抽出した。さらに因子負荷量.35以上の項目に対して因子分析を繰り返し行ったところ、表3-3-1に示されるような解釈可能な4因子が抽出された。

第1因子には、「勉強のための本（新書や専門書など）を読む」「授業とは関係のない勉強を自主的にする」「新聞を読む」の因子負荷が高かったので、「授業外の自主的勉強」因子と命名した。

第2因子には、「友だちとLINEやメールをする」「異性の友だちと直接会って交流する」「同性の友だちと直接会って交流する」「SNS（Twitter, Facebook, mixi, ブログなど）を利用する」「コンパや懇親会などに参加する」「クラブ・サークル活動・部活動をする」の因子負荷が

表3-3-1 大学生生活の過ごし方の因子分析

	因子1	因子2	因子3	因子4
授業外の自主的勉強				
勉強のための本（新書や専門書など）を読む	.73	-.02	-.01	.14
授業とは関係のない勉強を自主的にする	.63	-.05	-.09	.11
新聞を読む	.50	.01	.09	-.12
対人交際				
友だちとLINEやメールをする	-.09	.69	.04	.05
異性の友だちと直接会って交流する	.10	.68	-.18	-.05
同性の友だちと直接会って交流する	-.05	.59	.07	.23
SNS（Twitter, Facebook, mixi, ブログなど）を利用する	-.10	.45	.12	.09
コンパや懇親会などに参加する	.20	.39	.05	-.36
クラブ・サークル活動・部活動をする	-.04	.37	-.02	-.23
インターネット・マンガ・ゲーム				
マンガや雑誌を読む	.04	.00	.64	-.09
ゲーム（ゲーム機・スマートフォン・コンピュータゲームなど）をする	-.12	-.08	.55	.08
娯楽のための本（小説や一般書など）を読む	.29	-.05	.41	-.03
インターネットサーフィンをする	.01	.09	.37	.09
大学の授業・勉強				
大学で授業や実験に参加する	-.01	.11	.03	.52
授業に関する勉強（予習や復習, 課題など）をする	.26	.00	.01	.45
因子間相関	因子1	-.18	.03	.13
	因子2		.11	.10
	因子3			.10

高かったので、「対人交際」因子と命名した。

第3因子には、「マンガや雑誌を読む」「ゲーム（ゲーム機・スマートフォン・コンピュータゲームなど）をする」「娯楽のための本（小説や一般書など）を読む」「インターネットサーフィンをする」の因子負荷が高かったので、「インターネット・マンガ・ゲーム」因子と命名した。

第4因子には、「大学で授業や実験に参加する」「授業に関する勉強（予習や復習，課題など）をする」の因子負荷が高かったので、「大学の授業・勉強」因子と命名した。

次に，大学生生活の過ごし方のタイプの明らかにするために，4つの下位尺度の合成得点のZスコアを算出し，Ginkgoを用いて2ステップのクラスタ分析を行った．最初に，4下位尺度の標準化された得点を用いて，Ward法（平方ユークリッド距離）でクラスタを分類し，次に，得られたクラスタの中心を用いて，K-means法で再度のクラスタ分析を行った．3～7クラスタを検討したところ，5クラスタが最も適当であると考えられた。

図3-3-1には，大学生生活の過ごし方4下位尺度における各クラスタ得点（Zスコア）を示した。

クラスタ1（114人）は，「授業外の自主的勉強」は最も多かったが，「対人交際」が少なく，「インターネット・マンガ・ゲーム」は平均とほぼ同じ，「大学の授業・勉強」は平均より多かった．このクラスタは，大学の授業に参加しているだけではなく，大学の授業以外の勉強に取り組んでいる群だと言えるだろう．

クラスタ2（85人）は，「インターネット・マンガ・ゲーム」が最も多かった，「授業外の自主的勉強」「対人交際」は平均より少なく，「大学の授業・勉強」は平均より多かった．このクラスタは，インターネット等ヴァーチャルな活動を中心に過ごしている群であると言えるだろう．

クラスタ3（156人）は，「対人交際」が最も多く，「授業外の自主的勉強」は平均より少なく，「大学の授業・勉強」「インターネット・マンガ・ゲーム」は平均より多かった．このクラスタは，大学の授業以外の勉強に取り組まない以外，ヴァーチャル活動，大学の授業，対人活動を行っている．特に，対人関係的な活動を中心に過ごしている群であると言えるだろう．

クラスタ4（136人）は，「大学の授業・勉強」「授業外の自主的勉強」「対人交際」「インターネット・マンガ・ゲーム」のいずれも少なかった．このクラスタは，授業や授業外の勉強を含め，全体に活動が不活発な群であると言えるだろう．

クラスタ5（214人）は，「大学の授業・勉強」は平均より多かったが，「授業外の自主的勉強」「対人交際」「インターネット・マンガ・ゲーム」は少なかった．大学の授業に出席するが，それ以外の活動にはあまり取り組まない群であると言えるだろう．

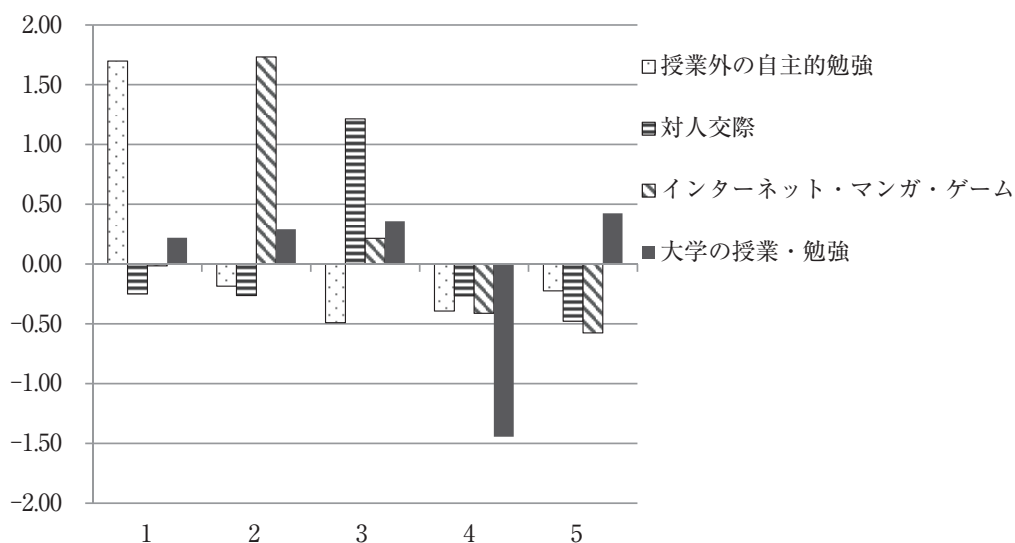


図3-3-1 クラスタ分析による生活時間の過ごし方のタイプ (Zスコア)

以上の結果にもとづき、都筑ら(2013, 2014, 2015)のクラスタ分析の結果を参照しながら、クラスタ1を主体的勉強群、クラスタ2をヴァーチャル活動群、クラスタ3を対人活動中心群、クラスタ4を低活動群、クラスタ5を授業出席勉強群と名付けた。

[梁 晋衡]

3.4 大学生生活の過ごし方によるアイデンティティの差異の検討

大学生生活の過ごし方によって学生の各アイデンティティ・コミットメント次元と各アイデンティティ・探求次元に差があるかを検討するために、大学生生活の過ごし方5タイプを独立変数、アイデンティティの5下位尺度を従属変数とした一要因の分散分析を行った。その結果、表3-4に示されたように、「コミットメント形成」、「コミットメントとの同一化」、「広い探求」、「深い探求」、「反芻的探求」において大学生生活の過ごし方タイプの主効果が有意だった(コミットメント形成: $F(4, 693) = 12.56, p < .001$, コミットメントとの同一化: $F(4, 686) = 10.32, p < .001$, 広い探求: $F(4, 692) = 12.26, p < .001$, 深い探求: $F(4, 688) = 13.27, p < .001$, 反芻的探求: $F(5, 694) = 3.96, p < .01$)。

TukeyのHSD法による多重比較を行ったところ、「コミットメント形成」に関して、主体的勉強群はヴァーチャル活動群、対人活動中心群、低活動群、授業出席勉強群よりも得点が高いことが示された($p < .001$)。

「コミットメントとの同一化」に関して、主体的勉強群はヴァーチャル活動群、対人活動中心

表3-4 大学生生活の過ごし方タイプにおける各アイデンティティ次元の違い

大学生の時間の使い方											
主体的勉強群(a) ヴァーチャル活動群(b) 対人活動中心群(c) 低活動群(d) 授業出席勉強群(e)											
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	
アイデンティティ											
コミットメント形成	3.59	0.89	2.80	1.01	2.96	0.93	2.89	1.01	2.91	0.96	12.56*** .068 a>b,c,d,e
コミットメントの同一化	3.22	0.77	2.58	0.76	2.84	0.72	2.70	0.85	2.83	0.78	10.32*** .057 a>b,c,d,e
広い探求	3.87	0.64	3.31	0.84	3.38	0.78	3.24	0.88	3.54	0.76	12.26*** .067 a>b,c/a>e>d
深い探求	3.57	0.69	2.94	0.79	3.11	0.78	2.93	0.79	3.07	0.74	13.27*** .072 a>b,c,d,e
反芻的探求	3.50	0.78	3.61	0.71	3.54	0.70	3.43	0.81	3.73	0.71	3.96** .023 e>d

注：*** $p < .001$, ** $p < .01$

群、低活動群、授業出席勉強群よりも得点が高いことが示された ($p < .001$)。

「広い探求」に関して、主体的勉強群はヴァーチャル活動群、対人活動中心群、低活動群、授業出席勉強群よりも得点が高く、授業出席勉強群はヴァーチャル活動群より高いことが示された ($p < .001$)。

「深い探求」に関して、主体的勉強群はヴァーチャル活動群、対人活動中心群、低活動群、授業出席勉強群よりも得点が高いことが示された ($p < .001$)。

「反芻的探求」に関して、授業出席勉強群は低活動群よりも得点が高いことが示された ($p < .01$)。

これらの結果から、大学生のアイデンティティ発達において、主体的勉強群は他の群よりアイデンティティ達成度が高いと示唆された。それは、主体的勉強群の大学生は日々大学の授業に参加しているだけではなく、授業以外の勉強や情報収集に関しても自ら取り組んでいるからだと考えられる。アイデンティティが発達する際に、アイデンティティに関する探求とコミットメントが重要な指標になっている。自分で探求した生き方とコミットメントが適合したことによって、アイデンティティの感覚を高める。主体的勉強群の大学生は、日々自ら取り組んでいる活動が多いことがアイデンティティの発達にプラスに影響していると考えられる。

授業出席勉強群は、反芻的探求の得点が最も高いと同時に広い探求の得点も高い傾向が示された。それは、授業出席勉強群の大学生は自分のアイデンティティに関して広い探求を行っていたが、コミットメントの決定はまだ行っていないためと考えられる。同時に、アイデンティティ・コミットメントがうまく統合できず、反芻的探求に落ち込むからだと考えられる。

他方、低活動群の大学生がアイデンティティの各探求次元において、得点が低い傾向が示された。それは、低活動群の大学生が日々生活において積極的に取り組んでいないため、自分自身のアイデンティティに関しても探求活動が行われていないからだと考えられる。

以上のことより, 大学生の大学生活において, 大学での授業に参加するだけではなく, 授業以外の活動に関しても積極的に取り込むことにより, アイデンティティの発達に影響していると考えられる。

[梁 晋衡]

3.5 大学生生活の過ごし方による就職活動の情報収集行動や進路探索行動への意識の違い

大学生生活の過ごし方によって, 就職活動における情報収集行動や進路探索行動への意識に違いがあるかを調べるため, 大学生生活の過ごし方の5タイプを独立変数, 情報収集行動(「企業に関する情報」・「就職活動の方法」・「自分自身に関する情報」)と進路探索行動を従属変数とした一要因の分散分析を行った。

その結果, 表3-5に示されているように, 「企業に関する情報」, 「就職活動の方法」, 「進路探索行動」において, 大学生生活の過ごし方タイプによる有意差が見られた(企業に関する情報: $F(4,661)=5.72$, $p<.001$, 就職活動の方法: $F(4,663)=5.49$, $p<.001$, 進路探索行動: $F(4,664)=4.30$, $p<.01$)。

差の見られた3つの下位尺度ごとに, TukeyのHSD法による多重比較を行ったところ, 「企業に関する情報」では, 「対人活動中心群」が「主体的勉強群」よりも有意に高く, さらに「対人活動中心群」と「授業出席勉強群」が「低活動群」よりも有意に高かった($p<.001$)。 「就職活動の方法」については, 「対人活動中心群」と「授業出席勉強群」が「主体的勉強群」と「低活動群」よりも有意に高かった($p<.001$)。 「進路探索行動」においては, 「対人活動中心群」が「ヴァーチャル活動群」, 「低活動群」よりも有意に高かった($p<.01$)。

これらの結果から, 「対人活動中心群」, 「授業出席勉強群」は, 「主体的勉強群」よりも「企業に関する情報」, 「就職活動の方法」への意識が高いことが明らかになった。 「対人活動中心

表3-5 大学生生活の過ごし方タイプにおける就職活動に関する情報収集行動や進路探索行動の重要さの違い

大学生の時間の使い方													
主体的勉強群(a) ヴァーチャル活動群(b) 対人活動中心群(c) 低活動群(d) 授業出席勉強群(e)													
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	F	η^2	多重比較
情報収集行動													
企業に関する情報	4.27	0.69	4.34	0.67	4.50	0.52	4.21	0.65	4.45	0.51	5.72***	.033	c>a/c,e>d
就職活動の方法	4.30	0.68	4.33	0.78	4.55	0.55	4.30	0.66	4.51	0.51	5.49***	.032	c,e>a,d
自分自身に関する情報	4.07	0.80	3.89	0.88	4.10	0.74	3.91	0.85	3.99	0.79	1.57	.009	
進路探索行動													
	4.10	0.68	4.03	0.74	4.31	0.62	4.05	0.71	4.23	0.61	4.30**	.025	c>b,d

注: *** $p<.001$, ** $p<.01$

群」と「授業出席勉強群」は、大学の授業にきちんと出席して勉強しているという特徴がある。一方、「主体的勉強群」は大学の授業の勉強だけでなく、資格のための勉強や専門研究の勉強などを自主的に行っているという特徴がある。大学での勉強に時間を使うことは、居場所感における「課題・目的の存在」を高めることがわかっている（都筑ら、2015）。それによって、就職活動における「企業に関する情報収集」や「就職活動方法」への意識も高められたと考えられる。

「進路探索行動」では、「対人活動中心群」が「ヴァーチャル活動群」、「低活動群」よりも意識が高かった。インターネット・マンガ・ゲームに時間を費やす「ヴァーチャル活動群」や活動が全般的に弱い「低活動群」は、学校への適応感が低いと考えられる（都筑ら、2015）。逆に、対人交際に時間をかける「対人活動中心群」は、学校への適応感が高く、それにより「進路探索行動」への意識も強まったと言える。

都筑ら（2013, 2014）は、大学生活における対人活動の重要性を指摘したが、就職活動の就職情報収集や進路探索行動への意識に関しても同じ結果となった。大学卒業後の就職を勝ち取るためには、就職活動の情報収集や進路探索行動を積極的に行うことが大切である。そのためには、就職情報収集や進路探索行動への意識を高める必要があり、日頃の大学生活の過ごし方如何で大きく変わってくることが明らかになった。

〔早川みどり〕

3.6 大学生生活の過ごし方による就職活動に対する不安の違い

大学生生活の過ごし方によって就職活動に対する不安に違いがあるかどうかを検討するために、大学生生活の過ごし方5タイプを独立変数、就職活動不安の5つの下位尺度を従属変数とした一要因の分散分析を行った。その結果、表3-6に示したように、「サポート不安」を除く4尺度において、大学生生活の過ごし方タイプによる有意差が認められたので、下位尺度ごとにTukeyのHSD法による多重解析を行った。その結果、「アピール不安」($F(4,661)=5.62, p<.001$)では、「授業出席勉強群」が、「主体的勉強群」($p<.05$)、「低活動群」($p<.001$)と比べ、有意に高かった。「就活継続不安」は、「授業出席勉強群」が、「主体的勉強群」と比べ、有意に高かった($p<.05$)。「試験不安」は、「対人活動中心群」($p<.01$)、「授業出席勉強群」($p<.05$)が、「主体的勉強群」と比べ、有意に高かった。「準備不足不安」は、「ヴァーチャル活動群」($p<.05$)、「対人活動中心群」($p<.01$)、「授業出席勉強群」($p<.01$)が、「主体的勉強群」と比べ、有意に高かった。

これらの結果、「授業中心勉強群」は、「アピール不安」、「就活継続不安」、「試験不安」、「準

「準備不足不安」の4尺度に関して「主体的勉強群」と比べ就職活動に対する不安が有意に高かった。「授業中心勉強群」と「主体的勉強群」の大学生生活の過ごし方の違いは、前者が大学の授業には出席するがそれ以外の活動にはあまり取り組まない群であるのに対し、後者は大学の授業に参加しているだけでなく大学の授業以外の勉強にも取り組んでいることに特徴があり、大学の授業以外の勉強に取り組んでいることが、就職活動不安を軽減させることが示唆された。しかし、「授業中心勉強群」のような就職活動不安の高い群の実際の就職活動が低いかどうかについては、相反する報告がある。松田・永作・新井(2010)は、就職活動不安が活動を低下させるとしている一方で、Blustein & Phillips (1988)は、不安が高いほど就職活動より多く行われると報告している。この違いについて松田・永作・新井(2010)は、測定した不安が経験される時期が異なることと、就職活動に含まれる活動内容が違うことによるとしている。また、不安が高いゆえに最悪の事態を想定し、失敗を回避するために活発に活動を行うタイプがあることが報告されている(堀越・小玉, 2006; Norem & Cantor, 1986)。

「対人活動中心群」は「試験不安」, 「準備不足不安」の2尺度に関して「主体的勉強群」と比べ就職活動に対する不安が有意に高かった。「対人活動中心群」と「主体的勉強群」の大学生生活の過ごし方の違いは、両者とも大学の授業には出席するがそれ以外の活動で、前者は対人交際が多く、後者は大学の授業以外の勉強にも取り組んでいることに特徴がある。「対人活動中心群」は、コミュニケーション能力(藤本・大坊, 2007; 大坊, 2003), クリティカルシンキング(廣岡・元吉・小川・斎藤, 2000; 廣岡・元吉・小川・斎藤, 2000), ハーディネス(森・東條・佐々木, 2005)などの大学卒業後に必要な能力が高く(都筑ら, 2014), 学校適応感も高かった(都筑ら, 2015)。それらのことから、就職活動不安も低いことが予測されたが、本調査では、不安の高い尺度があることが示された。その一方で、「アピール不安」「就活継続不安」など、対人活動に関連が強いと思われる尺度は「主体的勉強群」と有意差がないので、「対人活動中心

表3-6 大学生生活の過ごし方タイプにおける就職活動に対する不安の違い

大学生の時間の使い方													
	主体的勉強群 (a)		ヴァーチャル活動群 (b)		対人活動中心群 (c)		低活動群 (d)		授業出席勉強群 (e)				
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	F	η^2	多重比較
就職活動不安													
アピール不安	3.75	1.05	3.76	1.11	3.80	0.93	3.57	1.05	4.07	0.86	5.62***	.033	e>a,d
サポート不安	3.05	1.01	3.08	1.09	2.94	1.02	3.07	1.01	3.16	1.11	0.99	.006	
就活継続不安	3.10	1.12	3.51	1.13	3.43	1.06	3.27	1.14	3.49	1.10	2.83*	.017	e>a
試験不安	3.36	1.02	3.59	1.04	3.78	0.96	3.57	0.96	3.74	0.92	3.68**	.022	c,e>a
準備不足不安	3.37	1.03	3.82	1.02	3.82	0.95	3.63	0.93	3.78	0.90	4.57**	.027	b,c,e>a

注: *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

群」への就職活動支援は、「試験不安」、「準備不足不安」に焦点を当てる必要があると思われる。このことから、学生が就職活動のどういう側面に不安を感じているのかを捉えて介入していくことが、今後の検討課題として重要であると考えられた。

〔宮崎伸一〕

3.7 大学生生活の過ごし方による就職活動に対する自己効力感の差異の検討

大学生生活の過ごし方によって就職活動に対する自己効力感の程度に違いがあるかどうかを検討するために、大学生生活の過ごし方5タイプを独立変数、就職活動自己効力感の3つの下位尺度を従属変数とした一要因の分散分析を行った。その結果、表3-7に示したように、「就職活動への効力期待」、「就職活動への結果期待」の各下位尺度において、大学生の大学生生活の過ごし方タイプによる有意差が認められた。

下位尺度ごとに Tukey の HSD 法による多重比較を実施し、「就職活動への効力期待」($F(4,664)=2.91, p<.05$)において、対人活動中心群がヴァーチャル活動群よりも有意に得点が高いことが認められた。「就職活動への結果期待」($F(4,657)=3.25, p<.05$)においては、対人活動中心群がヴァーチャル活動群、低活動群よりも有意に得点が高いことが認められた。

これらの結果から、大学生の就職活動自己効力感は、対人活動中心群が高い傾向にあることが示唆された。他者との関わりを積極的に実行する大学生生活は、コミュニケーション能力が自然と磨かれるであろうことが容易に想像できる。逆に、ヴァーチャル活動群や低活動群は、積極的な直接の対人関係が少なく想像でき、それによって就職活動自己効力感が低いことに関連しているのであろうか。この点に関し、太田・岡村(2006)は就職活動に対する自己効力感が高い短大学生は、企業との接触数および内定の取得率も高いことを報告しており、培われた対人コミュニケーション・スキルが就職活動の積極性と成果に影響しているとも考えられる。また安達(2001)は将来の進路に対する探索的活動を促すために、個人的達成経験、代理経験、情緒的覚醒、言語的説得からアプローチすべきだと論じており、対人活動中心群がヴァーチャル活動群と低活動群に比較して上記4つの側面において大きなアドバンテージを持ち得ることが推測できる。さらに高橋・石井(2008)は、大学4年生を対象に、大学生生活の充実感が就職活動に対しプラスの影響を与えること、成長する要因の中で、大学生生活の人間関係に起因するものが最も大きいかについて仮説を立てて検証し、パス解析の結果、自己成長力から自己効力感へ影響を及ぼすことを報告している。

以上のことから、人間関係に起因する要素の活動が高まると、就職活動に対する自己効力感も増加していくことが考えられる。それが、就職活動自体へのモチベーションの上昇をもたら

表 3-7 大学生生活の過ごし方タイプにおける就職活動への自己効力感の違い

	大学生の時間の使い方												F	η^2	多重比較
	主体的勉強群 (a)		ヴァーチャル活動群 (b)		対人活動中心群 (c)		低活動群 (d)		授業出席勉強群 (e)						
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD					
	就職活動自己効力感														
自己と就職の統合への期待	3.48	0.74	3.29	0.82	3.43	0.83	3.40	0.84	3.38	0.85	0.65	.004			
就職活動への効力期待	3.37	0.61	3.19	0.56	3.45	0.66	3.29	0.62	3.31	0.57	2.91*	.018	c>b		
就職活動への結果期待	3.70	0.73	3.60	0.61	3.89	0.76	3.61	0.76	3.74	0.77	3.25*	.019	c>b,d		

注: * $p < .05$

し、さらに実際に企業等へ接触するような活動量や努力量が増大して、ひいては、内定率へ影響していくのではないだろうか。

〔村井 剛〕

3.8 大学生生活の過ごし方とアイデンティティと就職自己効力感との関連

大学生生活の過ごし方、アイデンティティおよび就職活動自己効力感との関連性について検討するため、構造方程式モデリングを用いて解析を行った。Blustein (1989) が指摘しているように、青年期後期の人々がアイデンティティを探索し、コミットするやり方によって、キャリアを探索し、職業にコミットするやり方が違って来る。そこで、図 3-8-1 に示したように、先行研究の理論知見に基づいて、大学生生活の過ごし方がアイデンティティ（探索とコミットメント）と就職活動自己効力感に影響し、アイデンティティが就職活動自己効力感に影響があると予想した。適合度の指標として χ^2 , GFI, AGFI, RMSEA, CFIを用いた。

上述のモデルを推定した結果を図 3-8-2 に示した。モデルの適合度は $\chi^2(27) = 141.81$,

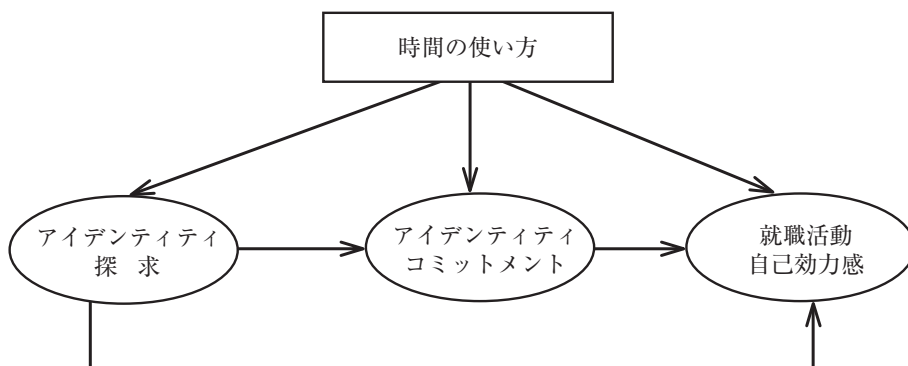
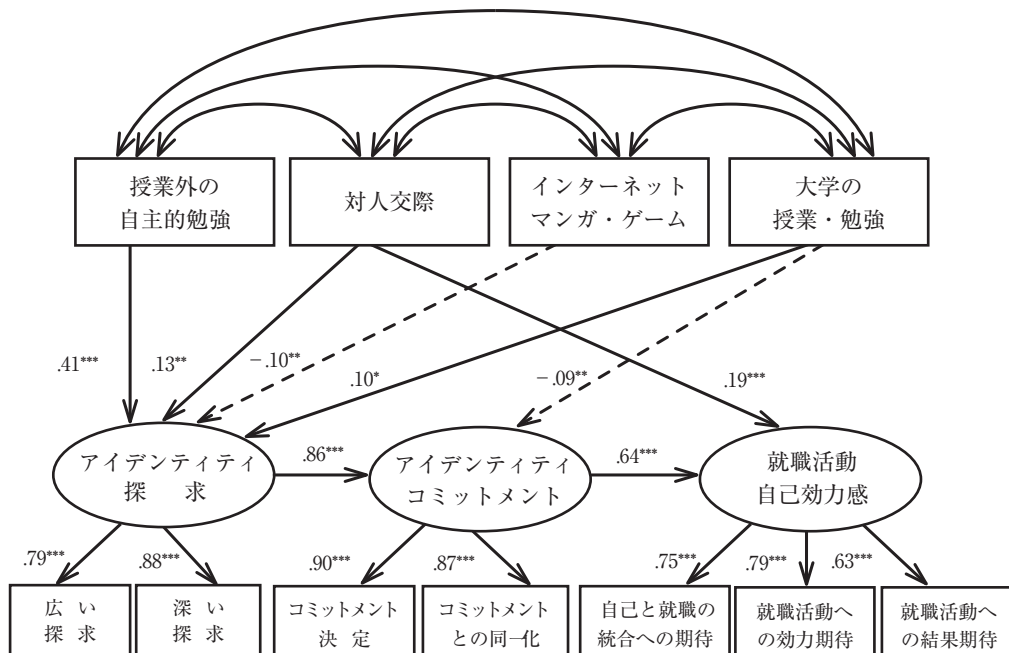


図 3-8-1 時間の使い方による就職活動自己効力感への影響過程の仮説モデル

$p < .001$, $GFI = .96$, $AGFI = .91$, $CFI = .95$, $RMSEA = .08$ であり, おおむね良好であるといえる. まず, 大学生生活の過ごし方の推定結果から, 授業外の自主的勉強, 対人交際, 大学の授業・勉強はアイデンティティ探求と正の関連を有していた ($\beta = .41$, $p < .001$; $\beta = .13$, $p < .01$; $\beta = .10$, $p < .05$). インターネット・マンガ・ゲームはアイデンティティ探求と負の関連を有していた ($\beta = -.10$, $p < .01$). 大学の授業・勉強はアイデンティティ・コミットメントと負の関連を有していた ($\beta = -.09$, $p < .01$). 対人交際は就職活動自己効力感に正の関連を有していた ($\beta = .19$, $p < .001$). これは, 日々大学生活において積極的に取り組んでいるほど, アイデンティティの探求に影響されると考えられる. さらに, 大学生活において, 対人交際活動を多く取り組んでいるほど, 就職活動への自己効力感を高める可能性が示唆された. しかし, インターネット・マンガ・ゲームのようなヴァーチャル活動はアイデンティティ探求に負の影響を与える可能性が示唆された. 他方, 大学生活において, 単に大学の授業・勉強に取り組むことがアイデンティティのコミットメントに役に立たないことが示された.

次に, アイデンティティと就職活動自己効力感との関連について, アイデンティティ探求は



注) Fit Index: $\chi^2 (27) = 141.81$, $p < .001$, $GFI = .96$, $AGFI = .91$, $CFI = .95$, $RMSEA = .08$

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

破線は負の関連を示す.

図 3-8-2 時間の使い方による就職活動自己効力感への影響過程のモデル

アイデンティティ・コミットメントと正の関連を有していた ($\beta = .86, p < .001$). アイデンティティ・コミットメントは就職活動自己効力感と正の関連を有していた ($\beta = .64, p < .001$). しかし, アイデンティティ探求と就職自己効力感との間に有意な結果が得られなかった. これは, アイデンティティ探求はアイデンティティ・コミットメントを経由して, 就職活動自己効力感に影響されると考えられる.

以上の結果から, おおむね仮説に支持された結果が得られた. つまり, 大学生生活の過ごし方がアイデンティティ探求に影響し, アイデンティティ探求がアイデンティティ・コミットメントに影響を与え, アイデンティティ・コミットメントが就職活動の自己効力感を高めることである.

〔梁 晋衡〕

3.9 大学生生活の過ごし方による就職活動の意識への影響について

大学生生活の過ごし方が就職活動への不安や自己効力感にどのように影響し, また就職活動における情報収集や進路選択行動に影響するのかを検討する.

大学生生活の過ごし方と学生の学校への適応との関連を統合的に検討するために構造方程式モデリングを用いたパス解析を行った. どのように時間を使い大学生生活を過ごすかは, 大学生生活の後半に待ち受ける就職活動に対する不安の持ち方や就職活動に対して自分が取り組むことができるかという自己効力感の持ち方に影響することが予想された. また, 就職活動の自己効力感や不安は進路選択に関する活動に影響することが指摘されている(浦上, 1995; 森田, 2014). このことから, 図3-9-1に示されたように, 大学生生活の過ごし方という大学生の実際の活動と就職活動への効力感や不安から就職活動に対する情報収集や進路探索行動が説明されると予想された.

まず今回の分析で用いた尺度の相関係数を表3-9-1に示した.

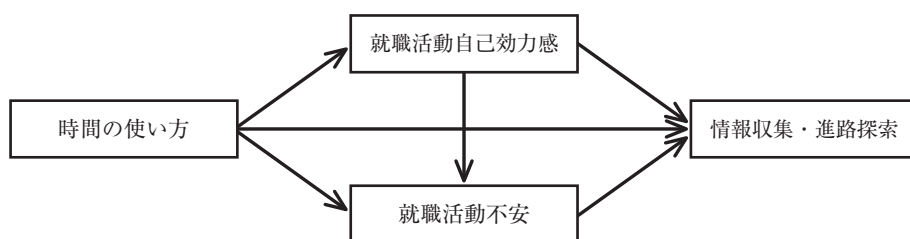


図3-9-1 時間の使い方による学校適応感への影響過程の仮説モデル

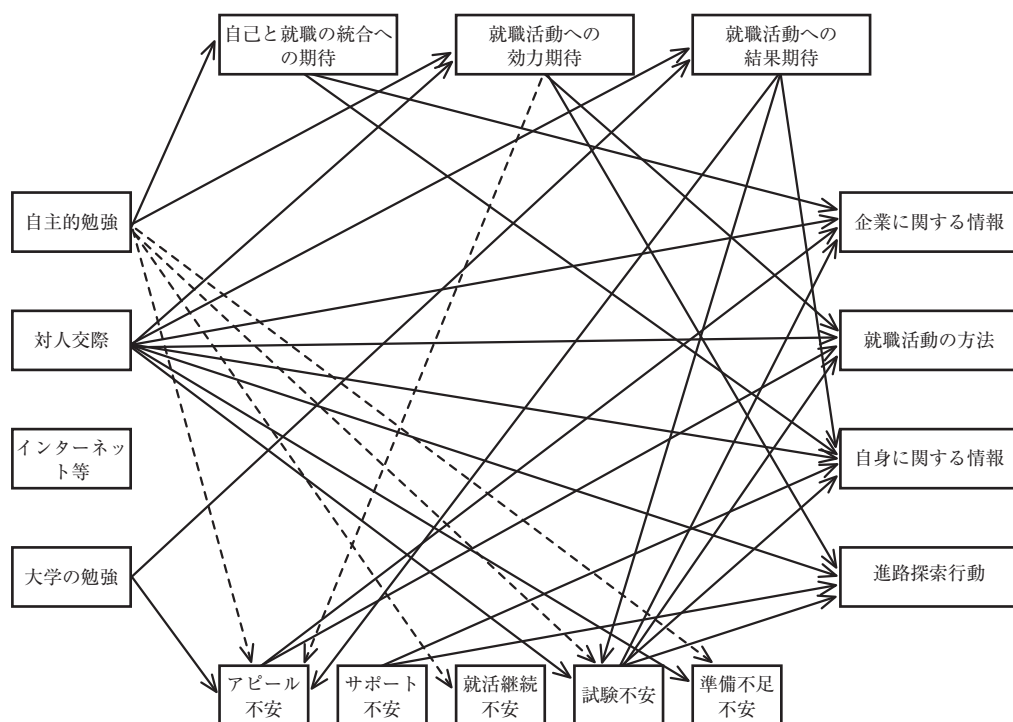
表 3-9-1 各尺度の平均値、標準偏差、相関

	(b)	(c)	(d)	(e)	(f)	(g)	(h)	(i)	(j)	(k)	(l)	(m)	(n)	(o)	(p)	Mean	SD
大学生活における時間の使い方																	
授業外の自主的勉強(a)	-.20***	.05	.14**	.12**	.13**	.03	-.07	.00	-.14**	-.14***	-.18***	-.08*	-.09*	.02	-.04	2.14	1.06
対人交際(b)		.08*	.10*	.08*	.16***	.19***	.00	-.02	.05	.11**	.11*	.23***	.13**	.15***	.16***	3.59	1.16
インターネット・マンガ・ゲーム(c)			.08	-.07	-.05	-.06	-.03	-.01	.02	-.03	.00	-.07	-.11**	-.04	-.10*	2.88	1.15
大学の授業・勉強(d)				-.02	.03	.09*	.14***	.01	.05	.07	.06	.17***	.16***	.08*	.14**	4.83	1.31
就職活動自己効力感																	
自己と就職の統合への期待(e)					.58***	.41***	-.16***	-.16***	-.19***	-.08*	-.16***	.14**	.05	.21***	.12**	3.40	0.83
就職活動への効力期待(f)						.54***	-.14**	-.14**	-.15***	-.05	-.15***	.21***	.16***	.26***	.32***	3.32	0.61
就職活動への結果期待(g)							.06***	-.05***	-.03***	.09***	.01***	.26***	.22***	.31***	.25***	3.73	0.74
就職活動不安																	
アビール不安(h)								.47***	.60***	.53***	.57***	.29***	.33***	.18***	.21***	3.84	1.00
サボート不安(i)									.64***	.57***	.61***	.13**	.16***	.25***	.21***	3.07	1.06
就活継続不安(j)										.59***	.66***	.17***	.22***	.17***	.20***	3.39	1.12
試験不安(k)											.71***	.24***	.28***	.27***	.28***	3.65	0.98
準備不足不安(l)												.20***	.26***	.20***	.21***	3.70	0.97
情報収集行動																	
企業に関する情報の収集(m)																	
就職活動の方法に関する情報収集(n)													.72***	.48***	.70***	4.39	0.58
自分自身に関する情報の収集(o)														.48***	.62***	4.44	0.61
進路探索行動(p)															.46***	4.00	0.80
																4.18	0.67

注：*** p < .001, ** p < .01, * p < .05

次に図3-9-1に示した仮説に基づき Amos20を用いて構造方程式モデリングによるパス解析を行った。有意でないパスを取り除き分析を繰り返した結果、図3-9-2に示した結果が得られた。図3-9-2ではパスの数値を省略しており、得られたパス係数を表3-9-2に示した。以下のモデルの適合度は $GFI = .97$, $AGFI = .94$, $CFI = .98$, $RMSEA = .04$ と十分な適合度が得られた。

これらの結果から、自主的な勉強に時間を使うことは、就職活動に対する情報収集や進路探索行動に直接的な影響はないものの、就職活動に対する自己効力感や、自分の進路を自己と関連付けることに対する自己効力感を高める効果があることが示された。また、自主的な勉強に時間を費やすことによって就職活動で自分をどのように表現するべきかというアピール不安や就職活動を継続していけるかどうかという就活継続不安、試験を受けることに対する試験不安、就職活動に対する準備ができていないのではないかという準備不足不安が低くなることが示された。



注: Fit Index: $GFI = .96$, $AGFI = .88$, $CFI = .94$, $RMSEA = .09$

実線は正の関連、破線は負の関連を示す。

図中の数値は R^2 値を示す。

図3-9-2 大学生生活の時間の使い方と就職活動に関する意識の関連モデル

表 3-9-2 各尺度のパス係数

説明変数	基準変数									
	自己と就職の統合への期待	就職活動への効力期待	就職活動への結果期待	アピール不安	サポート不安	就活継続不安	試験不安	準備不足不安	企業に関する情報	就職活動の方法
自主的勉強	.09*	.14***		-.07*		-.14***	-.13***	-.16***		
対人交際		.13***	.15***				.08*	.08**	.20***	.10**
インターネット・マンガ・ゲーム										
大学の勉強			.08***	.09**						
自己と就職の統合への期待									.14***	.17***
就職活動への効力期待				-.11**					.08**	.25***
就職活動への結果期待				.12***			.09***			.16***
アピール不安									.19***	.21***
サポート不安										.21***
就活継続不安										.14***
試験不安									.13**	.17***
準備不足不安									.14**	.20***

注：有意なパス係数（*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$ ）のみを記述。

対人交際に時間を使うことは、就職活動に関する情報収集や進路探索行動に直接的な効果を示した。対人交際に時間を使うほど企業、就職活動の方法、自分自身のそれぞれに関する情報収集に対して積極的な意識を持つようになることが示された。また就職活動に対する自己効力感に関しては就職活動がうまくいくと感ずることのできる結果期待や、就職活動に対する効力期待が高める影響があることが示された。就職活動の不安に関しては対人交際に時間を使うほど試験不安や準備不足不安が高まることが示された。

インターネット・マンガ・ゲームなどの娯楽に時間を費やすことは本研究で検討したいずれの変数に対しても影響は見られなかった。

大学での授業などの勉強に時間を費やすことは授業外の自主的な勉強と同様に就職活動に対する情報収集や進路探索行動に直接的な影響はないことが示された。就職活動に対する自己効力感に関しては就職活動の結果期待を高める効果があり、就職活動に対する不安に関してはアピール不安が高まることが示された。

〔永井暁行〕

4. 全体的考察

本研究の目的は、次の2点であった。第1は、大学生生活の過ごし方によって、青年期の発達の課題であるアイデンティティの様相がどのように異なっているかを明らかにすることであった。第2は、大学生生活の過ごし方のタイプによって、就職活動における自己効力、情報収集行動、進路探索行動、不安のあり方がいかに異なっているのかを明らかにすることであった。

予備調査で新たに作成した大学生生活過ごし方尺度を用いてクラスタ分析したところ、主体的勉強群、ヴァーチャル活動群、対人活動中心群、低活動群、授業出席勉強群という5つの異なるタイプの存在が明らかになった。

第1の点に関して、大学での授業・勉強や授業外の自主的勉強、対人交際はアイデンティティ探究を促進することがわかった。インターネット・マンガ・ゲームなどの活動は、アイデンティティ探究を妨げることもわかった。また、大学での授業・勉強だけでは、アイデンティティ・コミットメントが高まらないことも明らかになった。それに対して、対人交際活動に取り組むほど、アイデンティティ・コミットメントを介して、就職活動の自己効力を高めることもわかった。このように大学生生活の過ごし方の違いが、アイデンティティの発達に影響することが示された。

第2の点に関して、対人交際の活動は、就職活動の就職情報収集や進路探索行動、自己効力感を高めることがわかった。同時に、対人活動中心群では、試験不安や準備不足不安も強いことが明らかになった。自主的勉強中心群は、授業出席勉強群よりも、就職活動に対する不安(アピール不安、就活継続不安、試験不安、準備不足不安)が低いことがわかった。

上記のような特徴をふまえて、本研究では大学生の時間の過ごし方が就職活動への自己効力感や不安に対してどのように影響しているのかを検討するために、パス解析によってそれらの関連を検討した。その結果、大学生生活の過ごし方の内、対人交際のみが就職活動に関する情報収集や進路探索行動を促進するという結果が得られた。自主的な勉強や大学の授業に関する勉強に関しても就職活動に関する自己効力感や不安を通して間接的に情報収集や進路探索行動に影響を及ぼすことが示された。

以上の結果から、本研究ではまず大学生生活において他者との関わりを持つということに時間を費やすことの就職活動への肯定的影響があることが示された。都筑ら(2013, 2014, 2015)において大学生が対人活動を行うことの重要性が指摘されている。大学生生活を送る上で対人活動に時間を使うことができることによって適応を保っている学生像がこれらの研究から伺える

が、本研究によって大学生活（都筑ら，2015）や大学生活で獲得する能力（都筑ら，2014）への適応だけでなく，大学から社会への接続という点においても他者との関わりを持つことは重要であると言える．また，対人交際は就職活動への自己効力感のうち，効力期待や結果期待を高める効果も得られた．他者との関わりに時間を使うことによって，就職活動を継続したり良い結果を生むためのソーシャル・サポートの受容を高めている可能性がある．今後の検討では大学生活においてなぜ対人的な活動を行うことが就職活動への態度を肯定的なものへとするのかを検討していくことで，就職活動に向かう学生の支援に役立つ研究ができるだろう．

授業外の自主的な勉強と大学の授業に関する勉強についてはいずれも就職活動の情報収集や進路探索行動には直接的な影響は見られなかった．この2つの時間の過ごし方については勉強への態度という点で共通しているが，就職活動への意識という点では対照的な結果を示したと言える．授業外の自主的な勉強は特に就職活動に取り組むことができるという効力期待を高め，授業に関する勉強は就職活動が結果的にうまくいくだろうという結果期待を高めた．また，授業に関する勉強に時間を費やすことはアピール不安を高めるが，授業外の自主的な勉強はサポート不安を除く就職活動不安を低減させる効果が示された．自己効力感については自主的な勉強によって向上すると考えられる効力期待は不安を抑え，進路探索行動を高めるという点で間接的に就職活動への態度を肯定的な方向に導くと言える．これは先行研究で指摘される自己効力感の働きとして妥当なものであると言える（浦上，1995；森田，2014）．一方で対人交際や授業に関する勉強に取り組むことで高まると考えられる就職活動への結果期待はアピール不安や試験不安を高めながらも，自分自身に関する情報を収集しようとする態度を強めることが分かった．就職活動に対してうまくいくという効力感を抱くことは他方でアピールできるかどうかや試験を乗り切れるかどうかという自身の就職活動に関する能力的な側面での不安を喚起してしまう．そのため特に自分自身に関する情報を収集するという態度を高めているという結果が得られたと考えられる．

それでは不安が喚起されることは大学生の就職活動において問題のある現象と言えるだろうか．本研究の結果からはアピール不安，サポート不安，試験不安を感じることは必ずしも就職活動にとって否定的なものではないことが示された．これらの不安はいずれも何らかの就職活動に関する情報収集や，進路探索行動に対する態度を肯定的にする効果を持っていることが示された．就職活動に対する不安が高まることによって，就職活動に対する情報収集や進路探索行動に対して積極的になることが現在の大学生の傾向として指摘することができるだろう．そして就職活動に対する進路探索行動への積極性は実際の就職活動においても重要である（都筑ら，2014）ことから，就職活動への不安を感じることは就職活動を乗り越え，大学生から社会

人へと移行していく上で重要な要素であることが指摘できる。

以上のことから本研究では就職活動に関する情報収集や進路探索行動に対して積極的になる要因について3つの過程があることが示されたと言える。第1に大学生活において他者との関わりを多く持つことで直接就職活動に対して積極的になるという過程である。就職活動も面接試験などの他者との関わりを多く経験しなければならないという特性上、大学生活の中で他者に関わる経験は大学生にとって重要な要因となることが示唆された。第2に授業という枠組みを超えて自主的に勉強することによって就職活動もうまく取り組めるだろうという効力感を高めることで進路探索行動に積極的に取り組んでいくという過程である。これは従来の自己効力感(浦上, 1995; 森田, 2014)の効果によって就職活動に積極的になるという過程であると言える。その自己効力感を高めるためには主体的な勉強という態度が重要であることが新たに示された。第3に他者との関わりや大学の授業を受けていることで結果的に就職活動への不安が高まるが、その不安によって就職活動に関する情報収集や進路探索行動が動機づけられるという過程である。一般的に不安が喚起されることはネガティブなことだと捉えられ、実際に不安の高まりによる影響も指摘されている(藤井, 1999)ものの、現在の大学生はその不安を原動力に就職活動に取り組もうとしている姿勢を取っていることが示唆されたと言える。

大学生活の過ごし方が学生の就職活動への意識に様々に影響することが示されたが、インターネットや漫画、ゲームなどの個人で行われることの多い娯楽的な活動に関してはいずれの影響も見られなかった。これらの活動は大学への適応という点でも外的な適応には否定的な影響を示している活動である(都筑ら, 2015)。本研究においても就職活動という外的な他者との関わりを必要とする活動においては、不安も効力感も高めないことが示された。前述したように本研究において就職活動への不安は就職活動に対する態度を積極的にするという点で重要な要因である。しかし、個人的な活動である側面の強い娯楽は他者との関わりも比較的少なく、そのため自身の就職活動への不安にも効力感にも影響を与えにくいものと思われる。

今後の課題として、本研究では大学生活の時間の過ごし方が就職活動への意識にどのように影響するのかを検討し、ある程度の影響が見られることを示したが、なぜそのような影響が見られたのかというメカニズムについては明らかにすることができていない。今後は大学生活の過ごし方がどのような理由やメカニズムによって就職活動の不安や自己効力感を変動させているのかを検討していく必要がある。また、本研究では4年生を研究対象とはしていないため、就職活動への参加は学生にとって未来のことであり、就職活動という自身の近い未来や就職後の人生という将来を彼らがどのように捉えているのかを合わせて検討する必要がある。また、今回影響が見られた就職活動に関する情報収集や進路探索行動についても実際の行動が大学生

活の過ごし方によって影響を受けるのかを検討していくことが望まれる。

〔永井暁行〕

付記 本研究に於ける調査は、2015年4月21日開催の保健体育研究所倫理委員会での承認を受けて実施されたものである。

文 献

- 安達智子 (2001) 大学生の進路発達過程 社会・認知的進路理論からの検討 教育心理学研究 49 : 326-336.
- Benesse 教育研究開発センター (2009) 放課後の生活時間調査報告書—小・中・高校生を対象に— 研究所報 Vol.55.
- Blustein, D. L. (1989) The role of career exploration in the career decision making of college students Journal of college student development, 30 : 111-117.
- Blustein, D. L., & Phillips, S., D. (1988) Individual and contextual factors in career exploration. Journal of Vocational Behavior, 22 : 312-323.
- 大坊郁夫 (2003) 社会的スキル・トレーニングの方法序説—適応的な対人関係の構築, 対人社会心理学研究 3 : 1-8.
- 藤井義久 (1999) 女子学生における就職不安に関する研究 心理学研究 70 : 417-420.
- 藤本学・大坊郁夫 (2007) コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み, パーソナリティ研究 15 : 347-361.
- 廣岡秀一・元吉忠寛・小川一美・斎藤和志 (2000) クリティカルシンキングに対する志向性の測定に関する探索的研究 (1) 日本社会心理学会第41回大会発表論文集 26 : 26-27.
- 廣岡秀一・元吉忠寛・小川一美・斎藤和志 (2001) クリティカルシンキングに対する志向性の測定に関する探索的研究 (2) 三重大学教育実践総合センター紀要 20 : 93-102.
- 堀越寛樹・小玉正博 (2006) 対蹠的悲観者の心理的 well-being の検討 心理学研究 77 : 141-148.
- 松田佑子・永作稔・新井邦二郎 (2010) 大学生の就職活動不安が就職活動に及ぼす影響 心理学研究 80 : 512-519.
- 溝上慎一 (2009) 「大学生生活の過ごし方」から見た学生の学びと成長の検討—正課・正課外のバランスのとれた活動が高い成長を示す— 京都大学高等教育研究 15 : 107-118.
- 森真依子・東條光彦・佐々木和義 (2005) ストレスに強い人格特性について—大学生用ハーディネス尺度の作成, 発達心理臨床研究 11 : 91-95.
- 森田愛子 (2014) 就職活動不安の高さと情報収集行動の関連—自己効力による違いの検討— キャリア教育研究 33 : 21-28.
- 中間玲子・杉村和美・畑野快・溝上慎一・都筑学 (2014) 多次元アイデンティティ発達尺度 (DIDS) によるアイデンティティ発達の検討と類型化の試み 心理学研究 85 : 549-559.
- Norem, J., & Cantor, N. (1986) Defensive pessimism: Harnessing anxiety as motivation. Journal of Personality and Social Psychology 51 : 1208-1217.
- 太田さつき・岡村一成 (2006) 「就職活動に対する自己効力感—測定尺度作成の試み—」 応用心理学研究 第31巻第2号 : 65-75.
- 高橋桂子・石井藍子 (2008) 大学生生活・就職活動が自己効力感に与える影響 新潟大学教育学部附属教

育実践総合センター研究紀要 教育実践総合研究 7:48-55.

都筑学・早川宏子・村井剛・早川みどり・金子泰之(2011)大学生生活の過ごし方のタイプとその心理的特徴についての検討 中央大学保健体育研究所紀要 29:7-33.

都筑学・早川宏子・村井剛・早川みどり・金子泰之(2012)大学生生活の過ごし方のタイプとその心理的特徴についての検討(2) 中央大学保健体育研究所紀要 30:1-33.

都筑学・早川宏子・宮崎伸一・村井剛・早川みどり・金子泰之・永井暁行・梁晋衡(2013)大学生生活の過ごし方のタイプとその心理的特徴についての検討(3) 中央大学保健体育研究所紀要 31:1-34.

都筑学・早川宏子・宮崎伸一・村井剛・早川みどり・永井暁行・梁晋衡(2014)大学生生活の過ごし方のタイプとその心理的特徴についての検討(4) 中央大学保健体育研究所紀要 32:11-34.

都筑学・早川宏子・宮崎伸一・早川みどり・永井暁行・梁晋衡(2015)大学生生活の過ごし方のタイプとその心理的特徴についての検討(5) 中央大学保健体育研究所紀要 33:1-18.

浦上昌則(1995)学生の進路選択に対する自己効力に関する研究 名古屋大学教育学部研究紀要 42:115-126.